

---

# 鳥籠

快流緋水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鳥籠

### 【Nコード】

N5331C

### 【作者名】

快流緋水

### 【あらすじ】

不思議な力を持つ彼。彼が捜し求めるものは？その先に見つめるのはなにか？いつだって見つめてきた彼女。なにがあっても一緒だった彼女。彼にしか分らない想い。彼女にしかない想い。2つが合わさるのか。

## ブローグ

それは、途方もない道であつた  
限りはなく  
終わりは見えず

それでも彼は歩き続けた

無の中から  
有を掴みたい  
探し求める道のり

追い求める彼の想いは限りなく

激しくもなく  
苦しくもなく  
坦々とした道

それでも光はなかなか見えない

果てしなく続く道  
明るさのない道  
行く末の保証はない道

それでも彼は歩き続けた

手に入れるために

## 出違い

町外れから始まる森は、常に霧で覆われていた。強い風が吹いても、さんさんと太陽が輝いても、乾燥した日でさえも。途切れることなく、霧は昼夜問わず存在している。そのため、人々の間ではこの森のことを『死界の境』であると言われていた。その死界の境の手前に、まるで番人のように住んでいる男性がいた。セレストブルー・カラー、23歳。170cmを超える長身で、肩より少し長い銀髪を束ねている。眼鏡を通してでも綺麗な青い瞳。端麗な顔が印象的な人である。なぜ、そのような人がこのような所に住んでいるのか。誰もが疑問に思っていたことである。町人の中には未だに問う者もいたが、セレストブルーは決まってこう答えた。『待ち人がいるのだ。』と。それは真意でもあるが、繕いでもあった。奥に隠された真意は、セレストブルーの能力にあった。彼は死者と話すことが出来、その上彷徨う死者を死界へ送る術を持っているのだ。そのキーとなるものが、セレストブルーが大事にしている鳥籠である。人々の間で言われている『死界の境』は単なる噂ではなく、本当のことであった。ここには、この世に未練がある者が彷徨っているのだ。その人たちを死者の世界へ送ることが、セレストブルーの生まれながらの役目である。方法は、大事に持っている鳥籠に死者を取り込み、鳥に変化させる。そして鳥となった死者を放し、死者の世界に飛んで行かせるのだ。

セレストブルーはパン屋を営んでいた。もちろん自分の能力を使って死者を葬送するのだが、表向きとして営んでいるのだ。19歳の頃からパンを作り続けているだけあって、味も食感も、誰もが認めるほどのパンであった。疎まれている死界の境のそばにわざわざ足を運ぶほどのパンである。売り上げも上々だ。

「セレストブルー、2つ頂戴。」

元気の良い子どもの声にうなずき、紙袋に丁寧に入れる。

「いつもありがとう。」

そう言つて手渡す。子どもは嬉しそうに受け取り、代金を置いて出て行つた。セレストブルーは代金を箱に入れ、他の客に顔を向ける。

「いらつしやいませ。」

微かな笑顔。本来ならば、美しい微笑なのだろう。だが、悲しみが広がっているためにそう見えなかった。

「まったく。あんたは顔がいいし、パンの味もいい。でも、いつも悲しげだね。いつまでも落ち込んでいるんじゃないよ。」

人の気持ちも察せずに、お節介を言い出す太ったおばさん。パンを買いに来るたびに、まずこれを言うのである。セレストブルーの心に、小さな引つかき傷が付けられる。それでも言い返さず、目を伏せる。

「それで、おいくつでしようか？」

「ふん。3つだね。客が来るから見栄えのいいやつにしておくね。」

「分かりました。」

セレストブルーは素直に従い、無理矢理つくつた笑顔を向けて渡した。おばさんは品を受け取ると、代金を粗雑において出て行つた。それを見送ると、セレストブルーは調理場に入り、心を静めるために、胸に手を当てる。

（忘れられるわけがない。）

胸に当てた手をぎゅっと強く握り、涙をこらえた。

セレストブルーが20歳のとき。パンが完売すると、鳥籠を手死界の境に足を踏み入れた。もちろん、自分が持つて生まれた能力を果たすためだ。

その日。セレストブルーは死者に出会わなかったので、帰ろうと家に足を向けた。だがそのとき、何かが動く気配がした。今までの

経験から、死界の境と言われているこの森に動物がいないことを知っていた。だから、セレストブルーはためらわずに気配がある方へ歩んだ。そこで彼の視線が捕らえたものは、死者ではなかった。生きている女性であった。

「君……。」

セレストブルーが呟くと、女性は驚いて振り返った。目鼻立ちがくつきりとしている、可憐な女性であった。

「あなた誰？死んでいるの？」

恐々と震える声で聞く女性。このように聞くのは、よその町から来た人であると推測される。

「俺は死んでいないよ。」

「じゃあどうして？」

セレストブルーは困って頭をかいた。事実を話すわけにはいかない。「とりあえず、俺の家に来い。こんな所にいると、今の君なら魂を持っていかれそうだ。」

セレストブルーは女性の手を引いて家に連れて行き、椅子に座らせた。戸惑う彼女に熱いココアを入れたマグカップを渡し、正面に座る。

「俺はセレストブルー・カラー、20歳。君は？」

女性を虜にさせる笑みを向けて聞く。女性は目を見開いて驚いたが、緊張の糸が解けたのか、安心したように吐息をして気を失ってしまった。

翌朝。セレストブルーはパンの仕込みをしていた。美味しくなるようにと思いつつ、パン生地を練る。結構な重労働であるが、この習慣が身に付いていたので、彼にとってはどうってことなかった。その姿を女性は見ていた。

（どうして私はここにいいのかしら？）

そう思いつつセレストブルーに近寄る。彼の真剣な姿を見て、段々と記憶が戻ってきた。ここに来るまでのいきさつを。でも、セレス

トブルーに声を掛けられなかった。とそのとき、彼と目が合った。

「あ、おはよう。テーブルの上にタオルがあっただろ。それを持って、井戸で顔を洗ってきなよ。」

「え、ええ。」

「ちよつと待つて。」

井戸へ行こうとした女性は慌てて振り返る。

「覚えていないだろうから、もう1度。」

セレストブルーは小麦粉が顔に少し付いているのにもかまわず、にっこりと微笑んだ。

「俺はセレストブルー・カラー。20歳。君は？」

「私はスカーレット・アジュレ。16歳。」

「スカーレットかあ。顔といい金髪といい名前といい。どれも可愛いね。」

口説くわけでもなく、それが素直な言葉であつた。スカーレットは照れて何も言えず、頭を下げてから井戸へ向かつた。

スカーレットが戻ってくると、テーブルには朝食が準備されていた。

「どうぞ座つて。俺が作ったもんだけど。」

言われるままにスカーレットは座り、朝食を見る。パン、スクランブルエッグ、サラダ、ミルク。質素ではあるが、どれも美味しそうである。

「いただきます。」

2人は黙つて食べ始めた。だが、セレストブルーは我慢しきれなかつたように口を開いた。

「なんで死界の境を歩いていたんだ？」

スカーレットの口の動きが止まり、セレストブルーをじつと見つめる。

「言いたくないのならいいけど。ただ、あそこで生きている人を初めて見たからな。」

「初めてつて、あなたはよくあそこに？」

問われた彼はニコツと笑って、ミルク瓶を差し出す。

「おかわりはいる？」

「え、あの？」

はぐらかされたのに戸惑うスカーレットだが、仕方なしにコップを差し出し、話し始めた。

「お金と家のためにお嫁に出されるところだったの。よくある話でしょ。でも、私は許せなかった。私は物じゃないのよ。だから、人に決め付けられる前に死のうと思ったの。」

自己を強く持つゆえに、許せなかったこと。内に燃える思いと現実の差に悲しく、セレストブルーはいたたまれない気持ちに包まれた。「どうしても死にたい？」

真剣な、悲しげな瞳で問うセレストブルー。スカーレットは首を振ろうとしたが、一瞬でそれを消してうなずいた。だが、彼はその一瞬を見逃さなかった。ニコツと軽やかな笑みを向ける。

「嘘をつかなくてもいいよ。」

見抜かれたスカーレットは思わず見つめ返してしまう。

「俺、色々な人と話すから分かるときがあるんだ。死にたくないんだろ。行くあてがなければ、ここに住んでもいいけど。どうする？」

優しい申し出。スカーレットの心に温かさが染み渡った。警戒心が減った彼女はこの申し出を受けることにした。

「それと言っちゃなんだけど、パン屋を手伝ってもらってもいいかな？」

「そのくらいのお手伝いなら、喜んでするわ。ありがとう、セレストブルー。」

「どーも。あ、名前が長いから、‘セレ’でいいよ。」

「そう。じゃあ、私のことも‘スカー’でお願い。」

「了解。」

こうして2人の生活が始まったのである。

それから2年半。この間で色々なことがあった。人の思いが錯綜した。そして、セレストブルーは変わってしまった。

## 自分の手

パンが完売したところで、セレストブルー・カラーは鳥籠を手に死界の境に赴いた。絶えることのない霧のせいで髪が湿っぽくなるが、それを気持ち良さそうにかき上げる。心持ち視界が良くなり、また歩み出す。

（スカー……。）

どうしても想いを馳せてしまうが、無理にでも断ち切って前進する。ふと、人影が見えてきた。死者である。死者はこの町の者だけとは限らないので、知らない人の場合もある。今回はそのパターンであつた。

「こんにちは。初めまして。」

死者はゆつくりと顔を上げ、セレストブルーを見据えた。死者はまだ若く、推定20代の女性であつた。

「いかなさいましたか？心残りがあるようですね。」

セレストブルーが優しく問いかけると、死者は泣きそうになりつつも心残りを語り出した。自分と引き換えに誕生した我が子のこと、心配であると。衛生がまだまだ不備であるから、このようなことは珍しくはない。だが、簡単に過ぎる去ることは出来ないのだ。この死者のように、行くべき死界へ向かえなくなってしまうのである。

「それはお辛いですね。」

「ええ。だから、あの子の側にいたいんです。ああ……。」

セレストブルーはそつと背を撫でて上げる。死者は嗚咽をもらしながらうつむく。

「苦しいでしょうが、死界へ行きませんか？」

「あなたは私の気持ちなんて分かっていないじゃない！愛しい子をこの手に抱けない私の気持ちなんて……！！」

まくしたてる死者。その言葉で、パンを買いに来た太ったおばさんに付けられた心の引つかき傷が、少し綻ぶ。

（俺だつて…！）

心をかき乱されたが、経験のお陰で逆上せずに済んだ彼は、悲しい目で死者を見つめ、小さく呟くように話しかける。

「ここにいて、お子さんは見えますか？」

我に返るそのセリフに死者は静止し、あっけにとられて見つめ返す。

「ここにいてもお子さんは見えませんよね。死界へ、夫へ行つて、そこからお子さんを見守ってください。」

哀願するように言い、そつと鳥籠の戸を開ける。すると死者は吸い込まれるように鳥籠に入り、発光した。その光が消えると、止まり木に鳥がいた。その鳥が彼女だ。

「少し強引だったかな。」

申し訳なさそうに呟き、それから鳥籠の戸を開けて、鳥に変化した死者を出す。

「死界へ行つて下さい。」

鳥はただピピピとだけ鳴いて、霧が深い方へ飛び立った。

「これでよし。」

そう言う彼の表情は明るくない。片が付いたのに、明るくない。むしろ、暗い。

セレストブルーは胸に手を当てる。痛い。

3年前。スカーレット・アジュレとの生活はなかなか楽しいものであった。パンの販売はスカーレットが見事にこなしてくれたので、セレストブルーは少し楽になっていた。ただ、問題があった。セレストブルーの能力と、その役目のことである。やすやすと打ち明けるわけにもいかないので、彼女にばれないように死界の境へ行くのが大変だった。

「スカー、お店を頼むね」

スカーレットは毎日そう言つて出て行く彼を、不思議そうに見返す。「よく出て行くのね。何をしているの？」

「ちょっとね。」

セレストブルーはニコツと微笑みかけてごまかし、鳥籠を手にして足早に家を出た。スカーレットとしてはお世話になっているから口には出したくない。だが、この不審な行動だけは気になって仕方がなかった。

（どこに行くとも言ってくれないし。好きな人の所だとしたら早いし。）

ふとそのとき、スカーレットは思い出した。初めて会った次の日、朝食を食べながらした会話を。その中で、彼は強引に質問をはぐらかしたのだ。『よく死界の境へ行くのか』といった内容の質問を、笑顔でかわしたのであった。

（まさか……。）

セレストブルーは死界の境を歩き回り、ようやく見つけた彷徨える死者と話していた。

「そうですか。お店が上手いかわなくて。では、俺がやっているパン屋が上手いければ、少しくらいはあなたの夢は叶いますよね？」優しく笑って問う。凄く、人を安心させる笑みであった。死者はあつけにとられたようであったが、大きくうなずいた。

「私のお店は駄目でしたが、その分あなたのお店が上手いって頂ければ幸いです。お願いします。」

死者はセレストブルーと握手をし、何度もお礼を言う。その隙に鳥籠の戸を開け、死者の魂を取り入れて鳥に変える。

（笑顔になってくれて良かった。）

「さあ、迷わずに行つて下さいね。」

鳥となった死者を放し、見送る。霧で見えなくなるとホツとして一息を付き、家に向かおうと振り返った。

「スカー。」

彼の視線の先にはスカーレットがいた。彼女は出来るだけ早くパンを完売させ、セレストブルーがしていることを見ようとして、追いかけて来たのであった。

「今のは何？」

不思議な光景を目の当たりにしただけに、声は震えていた。セレストブルーは仕方ないと言うように吐息し、肩をすくめた。

「話すよ。まず、帰ろうか。」

セレストブルーは鳥籠を持ち直し、さっさと家に向かった。スカレットは慌てて追いかけた。

セレストブルーは鳥籠を自室に置き、紅茶を入れてテーブルに着いた。スカレットもそれに続く。

「ごめん、驚かせて。誰にも知られなくなかったから、触れないようにしていたんだけれど。」

「セレ……。ごめんなさい。勝手に覗き見をしちゃって。つい気になっちゃったものだから。」

セレストブルーはにこやかに首を振り、それから自分の能力やしていることを話した。光景を見ていただけに、疑うことなく受け止めているスカレット。

「そうだったの。セレは優しいのね。」

それを聞いて、クスツと笑い出す彼。

「優しくないよ。まさに俺は死神。鳥籠はThe fatal hears…死神の利鎌だよ。」

自嘲する笑み。言葉に詰まって何も言えなくなるスカレットはうつむいてしまう。だが、思い立ったように手を伸ばし、セレストブルーの手に乗せる。

「セレは死神じゃないわ。私を助けてくれているもの。もしあなたが本当に死神なら、私はとくに殺されていたわ。そうでしょう？」  
彼女はやわらかく、にっこりと微笑んだ。それは、彼の冷えた心を温めるかのような笑顔であった。

「あなたは天上に行けない人を助けているから、優しい人よ。セレの手は、神の手みたいだね。」

ハッとさせられる言葉。今まで決して気付かなかったこと。セレストブルーはあいている手で顔を抑えた。指の隙間から、微かに涙が

つたう。

「ありがとう。」

初めて感じた、自分への温かな気持ち。自分の持つ能力を拒否しない思い。安心感が広がる。それと同時に、スカーレットへの気持ちも変化していった。

理解してくれ、全て受け入れてくれた人への想いはとても深い。  
だが、その人はいない。

## きっかけ

来る日も来る日も、変化のない毎日。パンを売り、なくなれば彷徨う死者を葬送する日々。平坦な道のり。ただ、その繰り返し。

死界の境を歩きながら、いつもすること。もちろん、彷徨える死者を捜し、説得して死界へ送ること。だが、それだけではない。今のセレストブルー・カラーがしていることは、それだけではない。

「どこにいるんだ？」

そつと呟く。その声はすぐに消えてしまう。

スカーレット・アジュレと一緒に生活をして約4ヶ月が経った頃、ある出来事が起こった。スカーレットが休憩をしているときに、いかつい男4人とセレストブルーよりも2、3歳年上に見える青年がやって来た。明らかにパンを買いに来た様子ではないので、セレストブルーはあえて挨拶をしなかった。

「出せよ。」

青年は唐突に切り出してきた。前触れもなく、ただそれだけを。いきなりのことなので、普通ならば困惑してしまうだろう。だが、少ない言葉でも相手の真意を読み取ることが出来るセレストブルーにとっては、相手が誰で、何をしに来たのが大方分かった。相手はスカーレットの婚約者で、彼女を連れ戻しに来た、ということ。分かったところで、素直に出すわけにはいかない。スカーレットの気持ちを知っているので、セレストブルーは対抗することに決めた。

「ここにはパンしかありませんが。」

セレストブルーはいかつい男たちの視線の威圧を無視し、強く言った。その言い方が癪に障ったのか、青年は顔をしかめる。

「この俺に逆らうのか？身の程知らずめ。」

セレストブルーを侮辱して吐き捨てる青年。それだけで、彼の性格

がどんなのが伺えられる。他人を見下している点など、良い人とは見られにくい性格であろうと。それでも、セレストブルーは下手に出る。

「逆らうなんて滅相もない。ここがパン屋であることはご覧になればお分かりでしょう。パン以外はございませんよ。ほかをお求めでしたら、町へ行かれたらいかがですか？」

持ち前の爽やかな笑みを向ける。相手にとっては、挑発しているように見えたであろう。

「やれ。」

青年はニヤツといやらしく笑んでから、いかつい男たちにそう言った。すると、男たちは店の奥へ、セレストブルーの自宅へ侵入しようとするのを向けた。その前を彼が立ち止まる。

「兄ちゃん、どきな。」

いかつい男はセレストブルーを手で払おうとした。しかし、彼に抑えられてしまう。セレストブルーの力は、意外にもいかつい男よりも上であった。

「たった3文字のあなたの要求は分かりませんよ。」

セレストブルーは手をそのままにし、青年を鋭く見据えた。

「分かるように言ってください。」

裏を返せば、「分かるように言わないと、こつちも容赦はしない。」ということである。セレストブルーはいかつい男の手を離し、青年と向き合う。青年は『裏』の意味が分かっているようで、怒っているのは明らかであった。だが、それに折れることなくセレストブルーは見返す。

「言えないのなら、お帰り下さい。」

「結構出来ている奴だな。おいつ。」

あっさりとした引き下がり方だが、内心ではかなり苛立っているようであった。それでも、いかつい男を後半の言葉だけで自分の後ろに下がらせる。

「オレはレイヴン・フリント。スカーレットの夫だ。迎えに来たか

ら、出してもらおうか。」

「夫？婚約者がいるとは聞いておりますが。」

「似たようなもんだ。さっさと出せよ。」

レイヴンの言い方が癪に障ったが、セレストブルーは大人しく従った。奥に行き、スカーレットを連れて出てくる。スカーレットはかなり嫌そうだ。

「さっさと出せばいいものを。スカーレット、帰るぞ。」

スカーレットはレイヴンを全く見ず、そっぽを向いて反抗を示す。

「あなたの所になんか帰りませんわ。」

「何の心配もいらぬのか？いいから来い。」

迫力のある声。それでもスカーレットは折れなかった。それがスカーレットである。そんな彼女が、強くこう言った。

「レイヴンの所に行っても幸せになれないわ。私は幸せにしてくれるセレの所に嫁ぐのよ。」

驚きを隠せないレイヴンに、スカーレットは力強く見返す。横にいるセレストブルーはレイヴンと同様に驚いていたが、それを隠して彼女の肩に手を回す。

「こういふことなのです。納得して頂けますね？」

うなづくことを強制させる言い方に、また事の流れに再び怒りが煮えたぎるレイヴン。だが、お坊ちゃん育ちの彼には反論が出来なかった。

「帰るぞ。」

いかつい男たちも納得していないようだが、黙ってレイヴンに従い、彼を守るようにして出て行った。レイヴンは最後まで2人を睨んだままであった。

「良家の人だね。もう来ないといいけれど。あ、ごめん。」

セレストブルーはスカーレットの肩に回していた手を慌てて離す。

そのとたんに、スカーレットは座り込んでしまった。緊張が一気に消えたのだ。

「スカー？」

「ごめんなさい。巻き込んだやってごめんなさい。」

セレストブルーは軽く微笑んで、申し訳なさそうに見上げるスカーレットを立たせる。

「構わないよ。少しは予想していたし。ただ、スカーの機転は思いつかかったね。」

「あ、あれは……。」

スカーレットの頬が急激に赤くなっていく。

「実は、あれは、私の気持ちなの。」

「そうなのか。って、ええ！？！？」

セレストブルーの頬も、徐々に赤くなっていく。実は、彼は自分の能力を理解し、支えてくれているスカーレットに愛情を寄せいていたのであった。彼女も、助けてくれた彼に、そして気持ちを理解してくれた彼に想いを寄せいていたのだ。

「嫌だった？」

「そんなことはない。」

見上げて問うスカーレットに、照れつつ答えるセレストブルー。そこで彼は意を決した。

「スカーレット、一緒に暮らさないか？今みたいじゃなく、夫婦として。」

明るい微笑みを添えたプロポーズ。スカーレットは満面の笑みで、彼に抱きついた。

「嬉しい。ありがとう！」

こうして、夫婦としての生活が始まった。それは笑顔が絶えず、楽しい日々であった。パン屋も好調であり、死者の葬送もつつなくこなしている。2人を取り巻く環境にさほど苦はなく、順風に乗った生活が続いていく。

死界の境を歩くセレストブルー。想いは広がるが、手ごたえはない。平坦な道だが、険しい。

「俺はここにいるのに……。」「  
寂しく呟く。その姿を、陰ながらに見守る人がいた。

## 剥奪

セレストブルー・カラーは死界の境の中に佇み、風を感じた。その風で更に感じる、頬をつたう涙とともに。

「どこにいたんだ？」

何度呟いたか分からないほど語り続けてきた言葉。何もいない、何もない死界の境で求める。無から有を掴みたい矛盾を承知していても、歩き続ける。返ってくるのは虚無感ばかりなのに。

（もう、いなくなつて半年経つのに。）

胸に痛みが走る。

スカーレットとの夫婦生活が始まつて2年の月日が過ぎた。出会いは良い場ではなかったが、2人の仲には支障はなかった。むしろ仲良く協力し合う2人は模範的な夫婦と言えたであろう。町の人々も2人を祝福し、温かく見守っていた。中にはひそかにセレストブルーを狙っていた女性がいたようだが、それも時が解決してくれた。

2人の関係は順調であつたが、かすかな不安は心に残っていた。

スカーレットの婚約者であつたレイヴン・フrintのことである。

スカーレットを迎えに来て以来、1度もカラー家を訪れていない。

町にもレイヴンは来ていないようだ。2人の気持ちを知らず、かけを作った本人だが、彼の行為には手をあげたくなる。その彼からは何もない。あるときだけで事は済んだのだろうか。いや、それは甘えかもしれない。もしかしたら、再びレイヴンは手下を連れて来る計画を練っているのかもしれないのだ。そう思うとスカーレットはもちろんのこと、彼女を想うセレストブルーも不安にさいなまれるのだ。そのため、死者の葬送を止めようと思っていた。だが、それをスカーレットは止めた。

「あなたが持つ能力よ。生かして欲しいわ。」

強く願うこと。スカーレット自身は彼のことに口を出したくないのだが、自分が絡んでいることもあって、思いを伝えた。渋るセレストブルー。彼女の思いも分かるが、彼女の身を案じると軽々しくうなずけない。

「そうだとすると、心配だ。」

「セレ、私のことは抜きにして答えて。セレはどうしたいの？」

つづらな瞳で見つめて問うスカーレット。質問の言葉は短くてどうってことないのだが、中に込められたものは重い。セレストブルーは閉口してしまう。だが、数分後によやく口を開いた。

「スカーのことは心配だ。出来れば目の届く範囲内にいて欲しい。でも、それは俺の我儘だし、俺は今まで通り葬送したいと思っている。陰ながらも人の役に立ちたいから。」

こうして話はまとまり、夫婦生活をしていても、セレストブルーは以前と同様に死者の葬送をしているのであった。スカーレットの支えがあったからこそ、続けられているのかもしれない。

その日も、パンが少なくなった頃に彼は鳥籠を手にして出て行った。いつも通り、「行つてらっしゃい」という言葉を背に受けて。

「今日は特に霧が濃いな。」

湿っている前髪を書き上げ、小さく呟く。この濃霧では彷徨う死者を見つけるのが難しいので、ため息まじりであった。

今日は無理かと諦めかけた頃、スーツと影がよぎった。死者であろう。セレストブルーはギュツと鳥籠の柄を握って駆ける。そこで目にしたのは、死者ではなかった。生きている人であった。だが、何よりも驚いたのは生死ではない。相手のこと。セレストブルーが見た影の正体は、レイヴンであった。

「オレのカン通り、貴様はここにいたんだな。」

勝ち誇った強気な笑み。それだけで事を知ったセレストブルーは、一気に青褪め、震え始める。

「幸せな夫婦生活だったか？」

過去形で言われ、更に青褪めるセレストブルー。ここで立ち話をしている時間はない。彼ははじめられたように家へ駆け出す。その後ろ姿をレイヴンは薄笑いを浮かべてみていた。

「オレに逆らうとこうなるんだよ。」

全速力で、一目散に家へ駆け込むセレストブルー。そこで目にしたものは、荒らされた部屋と血痕。ガシャンと鳥かごを投げ置き、台所、お風呂、店など、全ての部屋を見て回る。でも、人の姿はない。スカーレットの姿はない。

「スカー！！！」

心から叫ぶ。しかし、その声はむなしく響き、やがて無になってしまふ。

「俺がいない隙を狙ってレイヴンは……！！！」

怒りが全身を駆け巡る。それが強まり、今度は町へ向かって走り出した。スカーレットの足跡をたどるために。

「スカー！スカーレット！！！」

叫びながら走り、また道歩く人に彼女を見たかどうか聞いたりした。でも、手がかりとなる話は一切なく。狂ったように走り、叫ぶセレストブルー。この異変に町の人々は手を差し伸べたかったのだが、彼はそれを寄せ付けなかった。ただ走り、叫び、求める想い。玩具を取られた子どものように。でも、重さは違う。セレストブルーがスカーレットに寄せる想いは、計り知れない。他人がとやかく言えるものではないのだ。

夜になり、静かになった頃、セレストブルーはようやく家に戻った。誰もいない、殺伐とした部屋に。スカーレットが連れ去られたことを物語る部屋に。幸せをもぎ取られた部屋に。

「スカー。」

微かな叫び。支えのない不安がセレストブルーを支配する。それでも、彼はつぶれなかった。3ヶ月をつかってスカーレットを捜し歩いたのである。その結果は、悲しいものとなった。町を8つも見て探し回ったというのに。

これを境に、セレストブルーは変わってしまった。明るくて朗らかな彼が、一気に隠遁気味になってしまったのだ。かろうじてパン屋を営んでいるが、それが済むとすぐに死界の境に入るのであった。血痕のことから、スカーレットは死んだのかもしれないと思っているのだ。だがそれよりも、初めて会った場所だから、再びここで会えると思っているのだ。そうであって欲しいと。

涙で濡れた顔を袖でぬぐう。彼の待ち人・スカーレットはまだ現れない。想いがつのるばかりである。

## 囚われ

スカーレット・カラーは高級ソファーに座り、真向かいに座っているレイヴン・フリントを睨みつけていた。彼女の手足には合計20にもなる絆創膏が貼られていた。そして更に、4ヶ所も包帯で巻かれていた。散々たる状態だ。それでも痛い様子を見せず、ただひたすらにレイヴンを睨んでいた。所為のひどさを憎むように。

「2年も待つてやったんだ。」

「待たなくても結構です。私たちのことなんて放っておいてくださればいいのです。」

スーパーマグナム級をはるかに超える嫌味を込めて返す。普段は奥ゆかしい方なのだが、自分のこととなると強く出るのが彼女である。それをも知らないレイヴンにとって、スカーレットがただのじゃじや馬のように見えてしまうのだ。

「綺麗な顔でそんなに見つめられると照れるな。」

スカーレットの嫌味に気付いてか、気付かないでか、わざとらしく皮肉を言う。彼女にとっては何を言われても、レイヴンは憎悪の対象でしかない。さっと立ち上がる。

「さようなら。」

背を向けて退室しようとする。そこに声がかかった。

「馬車で2日もかかる道を楽に歩けるわけがない。ましてその傷だらけの身体では。それに、スカーレットはオレの妻だ。許可なく外出できると思うな。いいか、これは絶対だ。」

威圧する声。降伏を命ずる声。支配する声。それによってスカーレットは束縛されてしまう。だが、ここで折れるわけがない。屈するなんてとんでもないことだ。スカーレットの全身を、灼熱した思いが駆け巡る。

「嫌に決まっているわ。私はあなたの物じゃない。私はあなたの妻なんかじゃない。私はセレの。」

パシーン

スカーレットの頬に無慈悲な、独占的な制裁が走った。

「2度とその名を言うな。言ったら口を縫われると思え。分かったか！」

怒鳴り散らし、荒々しく出ていくレイヴン。スカーレットは力が抜けて座り込んでしまう。それからレイヴンの執着心に震える。家とお金のためだけとはいえ、なぜここまで執拗にされるのか。怖くてたまらない。

彼女は自分で自分を抱きしめ、なんとか落ち着かせてみるが、すぐに出来なかった。ここにセレストブルー・カラーはいない。そして、彼女の味方はいないのだ。孤立無援にさらされたスカーレット。そんな彼女の脳裏に浮かぶものは1つ。

ここにいたら殺される。

ただそれだけであつた。

セレストブルーはたった1人で夕食を口にしていた。スカーレットを想いつつ。その想いは決して消えることはなく、むしろ膨らむばかりだ。それだけ理解してくれる人への想いは深いのである。そんな彼がぼつりと呟いた。

「人の愛はどこまで続くのだろうか。」

小さな呟き。でも、重い呟き。

## 森の中で

セレストブルー・カラーの家から連れ去られて3ヶ月も経つ。スカーレット・フリントと名乗るように言いつけられた彼女は、実に辛抱強かった。家とお金のために嫁ぐことになったことを怨みつつ、両親を思って我慢した。貴族の集まりにも、演技をしてこなしてきた。レイブン・フリントからとやかく言われないよう、慎ましく過ごしてきた。

だが、誰にでも限界はある。

スカーレットは、この屋敷に閉じ込めて我が物にしているレイヴンが商談している間に逃げようと決心した。従者が始終館内を歩いているから逃げ出すのは難しい。だが、この3ヶ月のスカーレットを見てきて気が緩み始めたのか、彼女への監視の目は以前ほど厳しくはなかった。

「スカーレット、この商談が上手くいったら旅行にでも行くか？」

「あら、嬉しいわ。旅行だなんて久し振りなもの。」

につこり微笑みながら答える。その姿に驚いたのか、レイヴンは眉を一瞬吊り上げて彼女を見た。

「素直な答えだな。」

「そうかしら。レイヴンと暮らしてから、あなたの見方が変わったのよ。商談をまとめる敏腕なところや、力強い眼差しが素敵だと思つて。」

少し照れ、上目遣いに言うスカーレット。素晴らしい演技力である。レイヴンはすっかり騙されたようだ。スカーレットを抱き寄せ、額にキスをする。

「どこに行きたいか、考えている。すぐに終わらせるから。」

「分かったわ。待っているわね、あなた。」

につこりと微笑み返し、応接間に向かうレイヴンを見送る。これだよし。

いざ、セレストブルーの元へ。この3ヶ月間隈なく探して見つけた窓へ向かう。その窓は通りからも館の中からも、死角となっていない。こっそりと抜け出すには最適な窓だ。スカレットはこっそり持ち出した靴を履き、スカートをたくし上げ、窓枠を越える。

（正規のルートで行けば捕まるから、森の中だわ。）

足音を立てぬよう、それでいて駆け足で森へと急ぐ。森の中に身を隠せば、見つかる可能性は低くなる。

森に入ってすぐ、歩きやすくするためにスカートの裾を少し切る。そして、切れ端を防寒のために首に巻く。

（持ってこられたのはチーズとナイフだけ。）

先が思いやられる。ここからセレストブルーの所まで4日はかかるだろう。その4日間をこれだけで過ごさなければならぬのだ。ひもじい。でも、レイヴンの重圧の中で暮らすよりはるかにマシである。

スカレットは勇んで歩く。セレストブルーに駆け寄る日を夢見て。

一方、レイヴンの商談は難航していた。長くても2時間で相手を納得させて終わらせてきた。だが、今回はすでに3時間目に差し掛かるところであった。

（くそっ、頑固ジジイめ。）

心の中だけで悪態をつき、表面的にはにこやかにする。

「ここらへんでご納得頂けませんか？色々と買って頂けるので、私も頑張つて勉強させて頂きました……。」

先ほどより若干値を下げて提示する。相手は少し表情を崩すが、また堅くする。

「うーん、こつちも買うのだし、なんとかならないかね？」

痛いところを付いてくる相手。レイヴンは舌打ちしたくなる。それでもどうにかこうにか抑え、営業スマイルで相手を見る。

「これが限界ですよ、旦那様。」

「と言われてもだな、ここ以外に良い所はない。ここがベストなの

だよ。君が出してくれる品は良いものばかりだからな。だからこそ、君の所で契約をしたい。これだけの量を買いたい。どうかね？」

殺し文句を言われ、揺れ動く。ここらへんで相手を獲得しないと、逃がしてしまうかもしれない。レイヴンはうなだれる。そこに、ドアがノックされた。

「失礼。」

レイヴンは頭を下げ、ドアを開ける。

「商談中は来るな。一体何事だ？」

「お、奥様が……！」

「スカーレットがどうした？」

「どこにもいらっしやらないのです。」

レイヴンの表情が一気に険しくなる。

（やられたのか！？ちくしょう！）

商談相手の手前だけに、直に怒りを出せない。しかし、それでも事を伝えに来たメイドの背すじは凍った。

「捜して始末しろ。オレもすぐに行く。」

青褪めるメイドを無視してドアを閉め、やけに笑って席に戻る。

「失礼致しました。いい知らせが入ったもので。さて、それでは、そこまで言ったださるので頑張ってみましょう。」

レイヴンは先ほどよりも値下げをして見せつける。

「私も男ですからね。ここまでやってみましょう。これがダメならば、お引取り下さい。」

ころつと変わった態度に疑問を持ちつつも、提示された額を見る。思わずにやけてしまう。

「私が希望したものだろうね？」

「もちろんですよ。」

「よし。さすがだ。これでいこう。」

商談相手は軽やかに署名をして返す。

「今日は長くなったからこの辺で。また話そう。」

お互いに握手をし、商談が終了する。レイヴンは辛抱強く相手を見

送る。

さあ、狩りの始まりだ。レイヴンは執務室に護衛として雇っている屈強な男を10人集めた。

「スカーレットが逃げ出したことは知っているな？」

「はい。」

「奴の所に行ったに違いない。見つけ次第殺せ。」

初めて出される殺害命令に、さすがの男たちも戸惑い、お互いに顔を合わせる。

「なにぐずぐずしているんだ？」

癪癪を起こす1歩手前のような気迫に、思わず後ろに下がってしまふ。その中でリーダーの人が恐る恐る口を開いた。

「殺してもよろしいのですか？あちらの両親にはなんと説明をなさるおつもりですか？」

「いつ質問を許した？」

たったそのひと言で、屈強な男たちの肝が冷える。ここから早く退散したい思いに駆られてしまふ。

「いいから行け！」

押し出されるように退室する男たちに目もくれず、レイヴンはドカッと安楽椅子に座る。男たちが危惧していたことは、とづくに解決策を考え抜いていたことであつた。その解決策とは、偽装誘拐事件を仕立てることである。安易ではあるが、権力を握るレイヴンに口を出す人はそういないため、確実に近いことである。

（このオレに逆らつた罰だ。）

レイヴンはほくそえむ。人のことなんてどうでもいい。自分が全て、それがレイヴンという男だ。

スカーレットは獣道をひたすら歩いた。常に周囲に気を配り、時には物陰に潜んで人がいないかどうか確認した。最小限の休みしかとらず、とにかく歩き続けた。セレストブルーの元に帰るために。

夜中も手探りで前に進み、次の日の朝には隣町に付いた。気持ち

的にはこの町にいる友達の家に移りたいのだが、ぐつと気持ちを抑え、町を避けるように森の中を進んだ。この町の人に顔を見られると、レイヴンの追っ手に捕まる可能性が高くなってしまふ。自分の位置を教えるヒントを与えなくなかったのだ。

一方、レイヴンは報告が来なくて苛立っていた。だが、その中でもきちんと誘拐事件を偽装しておいた。そういう点は抜かりない。

スカーレットを追っている男10人は標的が見つからず、やきもきしていた。発見せずに、また始末せずに戻れるわけにはいかないのだ。隣町で聞き込み調査をするが、もちろんスカーレットの判断が勝っていた。手掛かりがなく、男たちは途方に暮れてしまふ。しかし、主人であるレイヴンの命令に背くわけにはいかない。あてもなく、スカーレットを見つけにぞろぞろと歩き続けた。

スカーレットがフrint家から逃亡して3日たった。セレストブルーの家まであと少しである。

(この森を抜ければセレに逢える……!!)

不眠で歩いてきたが、ここまで来ると睡魔なんてどこかに行ってしまう。マメが出来た足を多少引きずりつつも、嬉しそうに歩く。足取りは軽やかだ。

森に入ってから1時間経ったほど。チーズの最後のひとかけらを口に入れる。十分に味わってから飲み込む。これで最後の食料がなくなった。残ったのは、スカーレット自身とナイフのみ。ナイフは護身用として持ってきたのだが、どうやら出番はなさそうである。

「あと少し、頑張ろう。」

気持ちを口に出し、最後の気力を振り絞る。

フrint家を抜け出し、用心深く獣道を歩み、一睡もせずにセレストブルーの元に。本来側にいるべきだと信じてやまない人へ向かう。

そのとき、衝撃が走った。中心から、波紋のように。

## 逃走

スカーレット・アジュレが囚われてから半年あまりが経った。セレストブルー・カラーの3ヶ月にも及ぶ捜索にも結果が出なかった。セレストブルーにとって、身を裂かれる思いでこのときを過ごしていただろう。スカーレットといることが当たり前であり、彼女がいない生活は、彼にとって考えられないことなのだ。

なぜ、セレストブルーはここまでスカーレットに溺れているのか。自分の能力を明かしても変わらずに接してくれたからなのか。それもあるだろう。だが、それだけではない。能力を理解し、認めてくれたこと。さりげない言葉や気配り。そして、何よりもスカーレットの存在自身がセレストブルーを支えていた。いわば、スカーレットはセレストブルーにとってなくてはならない酸素のようなものだ。手離せない存在なのだ。

スカーレットは全身を駆け巡る痛みに耐え切れず、背中から倒れこんだ。その衝撃で、更に激痛がした。手足がしびれ、目が霞む。口からは血がこぼれた。あまりに一瞬で、それでいて時が止まったように。

スカーレットは悟った。最期であると。

(セレに逢いたいのに……!!)

希望が絶望に変わり、痛みよりもそのことで涙が溢れ出た。

ガサガサと草や落葉を掻き分ける音がスカーレットの耳に入った。誰かが来たようだ。

「お、おい！まずいぞ！」

狼狽した声に、スカーレットはなんとか目を開ける。視界はゼロに近いが、それでも人影が2つ見えた。どうやらその人の声らしい。

「人間かよ!？」

「矢が刺さってるよ。どーすんだよ!？」

この慌てぶりから、死の淵に落ちる寸前のスカーレットにも事が推測できた。動物に間違えられ、射られたのだと。この悲運にうなだれる。

「生きているのか？」

2人の内、年長の男が膝を折って近寄る。そこで、スカーレットはなけなしの力でその男に手を伸ばす。男は驚いたが、罪の意識から彼女の手をとる。

「すまない、こんなことになってしまつて。」

「ほつ…と…い…て…。」

それでこと切れた。身体に力は通っていない。徐々に温かさも失われている。そして、スカーレットの目には、もう何も映っていない。放っておこう。」

「ええ!？」

年長の男の言葉に驚きを見せるが、言つた本人はさつさと来た道をたどろうとする。

「殺しておいて、それはないだろ!？」

「放っておいてと言われたんだ。」

「でも…!」

年長の男は振り返り、まだ突っかかっている男の胸倉を乱雑に掴んだ。

「いいか。このことは絶対に言うな。忘れる!この女だつて、こんな所にいるんだから何か事情があるのだろう。いいから放っておくんだ!」

怒鳴りつけ、胸倉を掴んだ手を振り払うように荒く突き放し、来た道を戻って行つた。残された男は年長の男とスカーレットを交互に見て葛藤しているようだ。だが、諦めたかのようにため息をつき、先に行った男を追いかけて去つた。

スカーレットは、野ざらしに……。

スカーレットを始末しろと命じられたレイヴンの配下は、セレストブルーの家まで来ていた。もちろん、セレストブルーに気付かないように、木の陰から様子を窺っているのだ。馬車で来ているから、スカーレットを待ち構えていることになる。2度と彼女はここに来られないというのに。

「来ねーな。いつまでこうしてんだよ？」

待つことに痺れを切らした1人が口を開いた。それは、この場にいた全員の本音であろう。全員が揃って、困ったようにうなずく。

「でもまあ、ここにすることが1番確かなことだ。」

「ああ、だが、その3人は帰れ。レイヴン様に報告をしる。」

「歩きですか!？」

「ああ。人が隠れられそうな所を見つつ行け。帰りつつもスカーレット様を捜すんだ。報告をしたら、レイヴン様の指示を仰げ。」

歩きでフrintト家まで戻らなければならぬことに対して嫌な表情を満開にしていたが、さすがにリーダーからの命令には逆らえず、しぶしぶ歩いて行った。

報告のためフrintト家を目指す3人は町内ではなく、近道である森の中を歩いていった。落ち葉を蹴散らし、かつたるそうに歩いている。4日間も歩き続けれると思うと、そうなるのも無理はない。それでも命令には背けず、歩き続ける。

しばらくしてから、1番目の利く人が前方をいきなり指した。

「あそこ。」

「あ？なんだよ？」

先頭を歩いていた人が振り返り、嫌々そうに聞く。目の利く人はその声にうんざりしつつも、指す方向を見据えた。

「人が倒れている。」

「本当か？」

ここからでは見えない人にとって、信じられないようだ。だが、目の利く人は強くうなずく。

「どうするよ？」

3人は顔を見合わせる。無視するか、見に行くか。レイヴンならば無視したであろう。だが、配下はそこまで冷血ではない。

「行こうぜ。」

人が森の中で倒れているのは、普通では考えられない状況だ。何かが臭う。3人は少々怯えつつ歩み寄る。

「おい、あれって……！」

3人の目に映ったものは、死体。心臓を貫かれ、仰向けに倒れた女性。そう、スカーレットである。

「死んでいる！」

心臓がスピードを上げて動く。予想外のことに、視点が定まらない。「やべーよ、どうするんだよ？」

「ど、どうするって……。」

3人がそれぞれの慌てぶりにより、顔を見合わせる。その状態が数十秒続いた後、1人がセレストブルーの家の方へ走り出した。

「おい！？」

「死んでいるからこのままにしておこうぜ。とりあえず、リーダーの所に戻って報告した方がいって！」

3人はあまりのことに衝撃を受けつつも、慌てて来た道を走った。その後、3人の報告により、レイヴンの配下はスカーレットを確認した。自分たちが手を下さなかったにしろ、同じ家にいた人の死は胸に詰まるものだ。

それから、スカーレットの遺体を持って帰るわけにはいかないの、で、髪の毛を切り取り、証拠として持ち帰った。それを見たレイヴンは触りもせず、捨てるように命じた。思い通りにならない人は必要ないであろう。

スカーレットの遺体はそのまま、誰かに見つかることもなく獣の血肉となった。今はもう、ない。

セレストブルーに逢いたいのに。

## 行く先

セレストブルー・カラーがスカーレット・カラーを捜した3ヶ月。その3ヶ月間、彼は8つの町を隈なく捜していた。狂ったような捜索ではあったが、彼女を手離したくない思いからの行動であろう。しかし結果は実らず、独りでの帰宅となってしまうた。その結果には、レイヴン・フリントが絡んでいた。セレストブルーが尋ねてきても、嘘をつくようにお金を持たせて強制させていたのである。いくらセレストブルーが執拗に捜していても、何も出てこないわけだ。それほどレイヴンは2人を裂くことに徹底させていたのだ。

3ヶ月間徹底的に、血眼になって捜し、結果は虚無。それだけに彼のショックは大きく、彼自身を一変させてしまったのである。今日もまた、死界の境を歩き回っていた。すでに3人の死者を送り、疲れているようだ。しかし、帰宅しようと思わず、彷徨う死者を捜しに歩く。スカーレットを捜しているように、あちこちと歩く姿は痛々しい。まるで、絶望を背負っているようで。

スカーレットの死を事前に知っておきながらレイヴンは彼女の両親を呼び、彼らとともに再度スカーレットの死の報告を受けた。偽装誘拐事件をしたからには、彼らの前でそれらしいことをし、自分の正当性を主張しなければならぬ。だからこそ、レイヴンは報告を受けるなり嘆き悲しんだ。もちろん演技である。

「ああ、私のスカーレットが死んだなんて。一体誰が私の妻を。」スカーレットの両親はあまりの事に何も言えず、抱き合って泣いていた。お金と家のために嫁に出したとしても、我が子のことである。悲しいほかに何も無い。

「こんなに若くして逝くなんて。ああ、でも私よりあなたがたの方が悲しいでしょう。スカーレットの両親ですから。」

「いやいや。レイヴンも連れ合いを亡くしたのだから、お互い悲しいもんだよ。」

それから互いに慰め、しばらくしてからスカーレットの両親は悲しみを引きずりつつ帰った。

2人が帰ってから、レイヴンは顔を洗って気を引き締め、執務室で仕事を始める。先ほど見せた悲しさなんて微塵もない。むしろ清々しているように見える。実際、気分は晴れ晴れとしていることであろう。口答えるものが消えたのだから。しかも、自分の手を汚さずに済んだのだから。悲しむ必要はないのだ。

しかし、レイヴンの天下は長く続かなかった。

レイヴンはその後、告発されたのである。スカーレットの両親による告発であった。これは、フリント家に仕えるメイドや護衛の男たちがスカーレットの悲運にいたたまれなくなり、レイヴンを裏切って両親に実情を告白したから出て来たものである。レイヴンは当然の如く否定したが、メイドたちの供述を覆すことは出来なかった。そのため、レイヴンの名は貴族名簿から除名され、罰金を払うこととなったのだ。それから一生、レイヴンは最低の男として見られるようになった。

全て、自分の思い通りになるわけではないのだ。

死界の境を疲れていても歩くセレストブルー。家とは逆方向に進む。その様子は、死者を捜しているようではなかった。むしろ、自分の意志によって突き進んでいるかのようだ。とにかく奥へ。

奥に何があるのか、彼には予想がついていた。だからこそ、奥へ行く。楽になるために。

そこにブレーキがかかった。

「行かないで……!!」

## つがい

かけられたブレーキに、セレストブルー・カラーは背筋がゾクゾクするほど震えた。それから身体が硬直していった。時が止まったように。自分の身体がその場に凍りつくように。セレストブルー自身、身体が硬直していく様を感じられた。それほど掛けられた声に、彼は思いを揺さぶられた。それは。

「スカー？」

ようやく出た声は、掠れていた。だが、相手にはちゃんと届いていた。

「そうよ、セレ。」

全身に電気が走ったような、ビリツとした感覚に見舞われる。聞き取った声だけに、震えが止まらない。そこをなんとか抑えつけ、ゆっくりと振り返る。

「スカー……!!」

セレストブルーは鳥籠を手から離し、スカーレットをもう2度と離すまいとして抱き締める。だが、それで気付いてしまった。スカーレットが死者であることを。生身ではない抱き心地に、胸が詰まるセレストブルー。涙が溢れ出てきた。

「セレ、私」

セレストブルーは首を振ってセリフを遮る。口に出してまで、耳に入れてまで確認したくはない。

「分かっている。でも、今はこうさせて。」

ギュッと抱き締め、全感覚でスカーレットを感じる。これほど落ち着いたのは、何年振りであろうか。全身から滞っていたつかえがすっかり払われたかのように。始終身体を縛っていた緊張がほどけていく。セレストブルーはその安心感に溺れていくように……。

抱き合ってからしばらくして、スカーレットは彼の背中をやさしく叩いた。それを合図に、2人はそっと離れる。

「逢いたかった。」

「私もよ、セレ。こんな形になっちゃったけど。」

スカーレットの悲痛さを感じつつも、穏やかな微笑みを向ける。

「セレ？」

「この半年、スカーの行方が分からなかった。けれど、今はここに  
いる。それだけで俺は安心するよ。」

スカーレットは目を伏せる。

「でも私は」

セレストブルーは聞くまいとして、唇を重ねた。

「それでも俺は嬉しいから。」

「ありがとう。でも、こっちに来ちゃダメよ。」

彼女はそう言うのと、彼の手を引いて家の方へ足を向けた。その歩み  
から察すると、スカーレットは少し怒っているようだ。

「力があるんだから、この先に何があるってことぐらい分かるでし  
ょう？」

「良かったんだよ、それで。」

スカーレットはピタッと止まる。それに続いて止まるセレストブル  
ーの表情には、哀愁が漂っていた。

「どういうこと？」

「スカーがいなきゃ、生きている心地がしない。だから……。」

スカーレットは困惑した表情でセレストブルーを見上げた。言われ  
て嬉しいが、彼の死を決して望まない。それを察したのか、につこ  
りと優しく笑む。

「君がいなかった半年、どれだけ辛かったか。」

ズキツとする痛み。それは、お互い様。

「知ってる。」

「え？」

「貴方が辛かったことを、私は知っているわ。気付いたらここにい  
て、それからずっと貴方を見ていたから。」

スカーレットは死後、死界の境を彷徨っていたのである。逃げ出し

たのにセレストブルーに会えなかったという後悔が、彼女をここに引き寄せたのであろう。

「だったら声を掛けても……！」

詰まった声に、彼女は静かに首を振った。

「この状態を知られたくなかったのよ。でも、さつきは止めたくて……。」

セレストブルーは彼女を抱き寄せる。これほど心地よい人は、ほかにはいない。

「ありがとう。」

2人はしばし、余韻に浸る。逢えなかった半年を埋めるかのように、しばらくして、スカーレットが口を開いた。

「ねえ、お願いがあるの。」

スカーレットはセレストブルーの胸に顔をうずめつつ、すぐるように言った。なんとなく予想がついてしまったが、彼は頭を撫でて先を進める。

「私を貴方だけのものにして。」

私をその鳥籠に閉じ込めてと。

「いいの？」

「セレの側にいたい。」

スカーレットの想いがセレストブルーに絡み、溶け合う。それだけで、お互いに十分であった。

「愛しているよ、スカーレット。」

「私も愛しているわ、セレストブルー。」

2人はそっと離れ、最後のキスをする。

「ありがとう。」

セレストブルーは鳥籠の戸を開け、スカーレットを入れる。鳥籠の中で発光して鳥に変化したスカーレット。彼女は紅の羽根を持つ、可愛い小鳥に変化した。

「スカー！」

彼の目から、とめどなく涙が溢れる。

「俺も行くよ。」

セレストブルーは空を1度仰ぎ、それから鳥籠に入った。スカール  
ットのときと同様に発光し、彼も鳥に変化した。

鳥籠には蒼と紅の鳥が仲良く止まり木にいた。ときどきついでにみ  
ながら、さえずりあっている。それは凄く幸せそうで、生命感が溢  
れていた。

もう誰にも2人を引き離せない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5331c/>

---

鳥籠

2010年12月30日23時53分発行